

教育の力を信じ、共に歩む

学校支援課長 丸山 明生



2年前、ある小学校の6年生7人の日常を長期間にわたり取材した番組が放映されました。

東日本大震災後、その小学校では、新たな教育活動として「哲学対話」に取り組みました。対話を通じて子どもたちに考える力を育みたい、という教職員の思いがきっかけです。

7人は車座となり、さまざまなテーマについて何度も対話を行いました。お互いの考えを伝え合ったり、自分の考えを深めるために仲間に問いかけたりする姿が、やがて当たり前風景となりました。

令和2年2月27日、政府は全国の学校に臨時休校を要請します。

6年生を送る会の途中、校長は7人に伝えました。

「今日が皆さんにとって、小学校生活最後の日となります。」

その時、7人は表情を失い、そして言葉を失いました。卒業式に向け心を一つに合唱練習を行い、みんなでその日を心待ちにしてきたのです。送る会の最後、あんなに悲しそうにパプリカを踊る子どもたちを、私は見たことがありません。

教室に戻り、小学校での残されたわずかな時間の中、7人は自らの意志で哲学対話を始めます。テーマは、「臨時休校の決定について、なぜ子どもの意見は聞いてもらえないのか」でした。

7人は、お互いの本音を吐き出します。自分の考えをうまくまとめることができず、沈黙する仲間がいたら、せかすことなく、みんなでじっと発言を待ちます。哲学対話を通して、人を思いやる気持ちを育んだ子どもたちの姿が、そこにありました。

この番組で私が再確認したのは、教育の力です。

哲学対話に普段から取り組み、そのよさを実感した子どもたちは、小学校生活最後の、かけがえない時間の過ごし方として、仲間と対話することを選んだのです。教職員の思いから始まった教育活動が、日々のていねいな積み重ねを経て、このような子どもたちの姿として結実したことに、私は感動しました。きっと7人は、この日の哲学対話を一生忘れないでしょう。そしてこれからも、困難に直面した時、相手の気持ちに寄り添いながら、粘り強く対話を重ねていくことでしょう。

教職員の皆さんが子どもたちの資質・能力を育むために取り組んでいるすべての教育活動は、未来を切り拓く確かな力の礎となります。学びの最前線である学校園の現場で、日々、必死に子どもたちの学びや生活を支えてくださっている皆さんのご努力に、心より感謝申し上げます。

私たち学校支援課もまた、行政の現場で、頑張っている皆さんを支えます。

閉塞感のある、先の見通せない時代だからこそ、私たちは教育の力を信じ、子どもたちの未来のために共に歩いていきたいと、強く思います。今年度も、よろしくお願ひいたします。